



TITLE:

計画:1-6 伊豆・箱根地域のニホンザルの分布と個体数(Ⅱ 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

岡野, 美佐夫; 泉山, 茂之; 濱崎, 伸一郎

CITATION:

岡野, 美佐夫 ...[et al]. 計画:1-6 伊豆・箱根地域のニホンザルの分布と個体数(Ⅱ 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1992, 22: 55-56

ISSUE DATE:

1992-10-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/164386>

RIGHT:

このアンケート方法は期間がおおよそ1カ月だけであったが、群れを特定する方法としては有効であった。しかし、今回は山口県庁をとおして、被害対策のための調査と位置づけられていたため、緻密な資料が収拾できたと考えられる。正確で緻密なアンケート調査を行うには、目的を明確にするとともに、アンケート対象者の立場を配慮しなければいけない。

まとめ：今年度は島根県でテレメーター法による追跡調査を計画していた。しかし、捕獲と再捕獲の体制がとれず先送りになってしまった。捕獲と追跡の体制づくりはゆっくりと取り組んでゆきたい。

群れサイズの小型化は岩国市の野生ニホンザルの群れにも見られた。

計画：1-5

近畿圏におけるニホンザルの分布の実態調査 -その2

清水 聡・武田 庄平・金澤 忠博
(大阪大・人間科学)

近畿圏におけるニホンザル分布の実態調査の3年目として、今年度は昨年度に引き続き兵庫県における生息実態の調査を行った。

昨年度調査質問紙を送付して回答のなかった市役所、町・村役場に再度調査質問紙を送付し回答してもらったところ、昨年度分と合わせて結局91市町村の内91.2%にあたる83市町村より回答が得られた。

調査質問紙による分布状況は昨年度と同様であった。すなわち、1) 1970年代から複数回行われてきた過去の生息実態の調査が認められた地域には現在もニホンザルが生息していること、2) 昔は生息していたが、1970年代の調査において否定された但馬北東部において新たに集団の生息が確認されたこと、の2点である。

1) については、一部地域(美方町、春日町、大河内町、西紀町)で1980年代に大量の捕獲が実施され、集団数および個体数は減少している可能性が高いが、地域個体群として絶滅したわけではなく、従来から集団が生息していた地域では現在も生息し続けていることが明らかになった。

2) については、数度の実地調査を行った結果、豊岡市、城崎町、竹野町、日高町にまたがる地域

に3~4集団100~150頭が生息していることが明らかとなった。1970年代の調査で生息が否定されたこの地域において、1980年代になってニホンザルの生息が確認されるようになった理由については明らかにならなかったが、この地域においては、猿害は拡大しているようであった。この理由としては、植林、山村の開発等の理由の他に、転作によって米以外のサルの餌となる食物を山裾の畑に作るようになったことが考えられた。

上述した調査質問紙に対する回答結果および、実地調査の結果から、現在のところ兵庫県に生息するニホンザルは、ごく大ざっぱに見積もって、集団数は20~25程度、頭数としては800~1200程度といったところであると推定される。

計画：1-6

伊豆・箱根地域のニホンザルの分布と個体数

岡野美佐夫、泉山 茂之、濱崎伸一郎
(財)野生動物保護管理事務所)

今年度は、伊豆地域を対象に聞き取り調査を実施し、昨年度のアンケート調査の結果を補足、検討した。

聞き取り調査を実施した地域は、熱海市、大仁町、伊東市、中伊豆町、東伊豆町河津町、下田市、南伊豆町、松崎町、西伊豆町、賀茂村、土肥町、天城湯ヶ島の13市町村で、動物分布調査(環境庁1978年)の5キロメッシュ区画にして38区画に該当する。聞き取りは、農家や林業従事者を対象に、原則として1区画あたり4地点以上で実施し、全体で167件の聞き取り情報が得られた。その結果、伊豆半島において群れが分布する地域は、神奈川県湯河原町と隣接した熱海地域と、天城山脈より南の伊豆半島南部地域(伊東市南部、東伊豆町、河津町、下田市、南伊豆町、松崎町)の2地域であった。

昨年度の結果と合わせると、伊豆・箱根地域に生息するニホンザルの群れは、①箱根地域(群れ生息区画数：12)、②愛鷹山地域(群れ生息区画数：6)、③伊豆半島南部地域(群れ生息区画数：17)の3つの地域個体群に分かれ、①と②は東西に約10km、①と③、②と③は南北にそれぞれ20km、35kmほど離れて分布していることがわかった。

この結果を環境庁の動物分布調査の結果と比べると、群れの生息区画数が大幅に減少(50→35)

している。しかしながら、聞き取りの際に過去の生息確認についても質問したところ、環境庁の'78年調査以前から生息を確認していないとの回答がほとんどであり、これらの地域で群れが絶滅したと結論を出すのは危険で、むしろ'78年調査の精度に疑問を投げかける結果となった。

群れサイズについては、次のように聞き取りから一応の結果が得られた。10～20頭：14件、20～30頭：16件、30～40頭：1件、40～50頭：4件、100頭：1件、130～140頭：1件（波勝崎餌付け群）、60～80頭：2件（波勝崎餌付け群）。しかし、同じ地域でも回答者により確認頭数がまちまちのため、群れサイズの推定には不十分と判断し、今回、詳細な検討は行わなかった。

課 題 2

計画：2-1

ニホンザルのオスの集団移籍と生活史

古市剛史（明治学院大）

ニホンザルでは、オスが群れ間を移籍することが古くから知られている。しかしながら、野生群において群れを離脱したオスを追跡調査することは困難である。そのため研究対象とする群れにおける移出入の事例からオスの移籍パターンを推定するほかなく、オスが一生のどの時期にどのような移籍を行うのかといった生活史の全体像は明らかにされていない。

これまでの研究では、群れ内で高い順位にいたオスが低順位の個体として他の群れに移籍したり、ある群れに所属するオスが交尾期にだけ他の群れを訪問したりといった興味深いパターンが報告され、オスの繁殖戦略との関連で議論を呼んでいる。こういった議論を進めるためにも、野生群のオスの一生にわたる生活史を具体的に明らかにする必要がある。

この研究では、多数の野生群が連続して分布する屋久島研究林において、これまで個体識別に基づく研究が続けられてきた群れの3才以上のオスすべてに入れ墨を施して追跡し、移籍時の年齢や移籍先、移籍の前後での順位やメスとの関係の変化などを記録することを目指している。また容易な識別手段を提供することで、多くの観察者によ

る情報を有効に活用することも期待できる。

現在までに、主な研究対象となってきた3群のうち2群のすべてのオスと、残る1群のオス3頭（合計13頭）の入れ墨を完了した。また、あるオスの生後3回目までの移籍が確認されたり、一旦1位の地位を追われて移出したオスが、中順位のオスとして再移入してくるなど、いくつかの興味深い事例も観察されている。

この研究はまだ準備段階であり、実際の成果を得るには長期にわたる継続調査が必要であるが、将来的にはニホンザル研究に残る大きな課題のひとつに答えられるものだと考えている。

課 題 3

計画：3-1

チンパンジーの体毛等による父子判定

高崎浩幸

（京都大・アフリカ地域研究センター）

本研究は、前年度の体毛にひき続き、野生状態のチンパンジーから採取が可能な、DNAを含むサンプルとしての繊維質の植物性食物のしがみかすをとりあげ、野生チンパンジーの父子判定を目標として、DNAの抽出、精製およびPCR法によるDNAの増幅を試みたものである。

体毛よりも採取が簡単なサトウキビ等の繊維質の植物性食物のしがみかすに残された口腔内上皮細胞からのDNAの抽出、精製とPCR法による増幅の改良に重点を置いた。しがみかすは、直接観察によって落とした個体の識別が確実に行なえ、餌づけ集団では、サトウキビを直接特定の個体に与えてサンプルを採取できるという利点がある。

50mlの遠心管に濃度50%程度のエタノールと1mM程度のEDTAの中に液浸標本としたサンプルを低温室内で生理食塩水にあげて浮遊させ、ガーゼで粗くしがみかすと細胞浮遊液とを分離する。遠心によって細胞を集め、再度浮遊した状態にもどして、50ミクロンの目のセルストレーナーを通して、50ミクロン以上のゴミをのぞく。微小なゴミの混入が少ない場合にはこの段階で、植物やバクテリアのDNA抽出に多用されるCTABのはいったバッファーでプロテアーゼ処理、フェノールC I A A処理等のDNA抽出作業を行なう。50